資料１

第１回　文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）
（未定稿）

2020 年東京オリンピックパラリンピックを見据え、文化財の本来の価値・魅力をわかりやすく外国人観光客に伝えられるような環境整備を促進することが必要である。地方公共団体の教育委員会・観光部局及び文化財所有者が文化財の英語解説を行う際に参考になるような優良事例集をとりまとめるため、「第１回 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」を開催いたしました。

１．開催日時・場所

・ 日時：平成 27 年 10 月 14 日（水）14:00～16:00
・ 場所：中央合同庁舎 3 号館 10 階　海事局第 6 会議室

２．出席者（別紙のとおり）

３．配布資料

・ 配 席 図
・ 【資料1】文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催について
・ 【資料2】検討の背景及び議論の進め方について
・ 【参考資料1】観光立国の実現に向けた多言語対応の改善・教化のためのガイドライン（平成26年観光庁）
・ 【参考資料2】文化財の効果的な発信・活用ガイドブック（平成26年文化庁）

４．検討会での発言等

事務局の挨拶及び委員の紹介後、事務局より、資料 1 及び 2 について報告後、各委員よりそれぞれの取組や考え方について発表していただいた。以下、その要約

【岩橋委員】

○ 平成 3 年に神社本庁の国際業務担当部署が設立され、英文冊子を発行したり、国際会議で意見表明をして、神社・神道というものについて、外国向けに情報発信をしてきたが、冊子の内容が日本語で書いた文書をそのまま英訳しただけであり、内容を外国人が理解できるかを全く考慮していなかった。

○ これではダメだということで、平成 25 年の第 62 回 神宮式年遷宮をきっかけに、新たな冊子を発行することになり、日本語の文章を書かず、初めから英語で文章を作り、

これのデジタル版を神社本庁公式サイトで公開したところ、年間 300 万 DL（レディー・ガガ PV 再生回数と同等）と非常に好評であった。

○ その中で使った表現は、最初から日本語を考慮せず、英語を話す方々がどう理解するかについて、かなり悩んで作ったものであり、発信する側の理解を深めるというのも非常に重要ではないか。

○ 発信側の理解を深めるというのは、日本人に日本語で説明する時に、相手がある程度理解していることを前提として説明している。特に神主たちは、日本の伝統文化に精通しているので、平気で日本人にも理解できない言葉を使ってしまう。日本人が理解できない日本語を説明できるわけがない、ましてや英語にできるわけがないということなので、まずは日本語で理解した上で、より分かりやすい表現をしようと作ったのが、先ほど申し上げた冊子である。

○ これはまず日本人が英語を理解しようという意味で、英語でどう言えば伝わるのか、それを日本語で考えるときに、どういえば日本人にも伝わりやすいかを考えて、普通の英訳とは逆の手順で文化発信を試みようということで作ったのが、この冊子である。

○ ただ、課題もたくさんあり、神社によって、ご祭神も違えば、立地条件によっても神社の状況が違うし、氏子さんたちの信仰度合も全く違う。あと、外国語が分からないということで、単語を辞書で調べても、辞書の内容が間違っていることが多い。その時に必要になるのが、説明ということなのだが、日本語であれば、1,2 個の単語で済むものが、2 行～10 行ぐらいになってしまうこともあるので、それをどうするかを今悩んでいるところである。

【野田委員】

○ 先程の岩橋委員とは逆に、我々は神社仏閣が好きな一般観光客として見た場合にどうであるかという視点で考えてみた。

○ やはり英語で表記するにあたっては、まず日本語がまともな日本語になっていないと伝えることはできないので、まずどういった日本語を創るかということが一番大事であり、伝える側のひとりよがりでない、相手側の知識水準や関心レベルなどに沿った説明をする必要があるというのが、大前提である。

○ 要は海外から来られる方が、神社仏閣に行った時に何を求めて来ているのか、建物に興味があるのか、歴史に興味があるのか、宝物に興味があるのか、色々な関心があると思うが、それによって解説すべきポイントはいくつもある。

○ 英語表記と言っても、一つの神社仏閣に対してでも、日本は何度目か、どこまで造

詣が深いかによって、例えば初級・中級・上級といった説明文書が必要ではないかということである。

○ 次に、海外の人に説明する際に苦労するのが、一神教の文化圏の人に対して、日本の多神教と神様仏様という言葉にもあるように、神道と仏教が並列している文化をどう伝えるかというところで、非常に難儀する。日本人は神というと、英語でGodと習うが、これを平気で言ってしまうと大変な話になってしまう。例えば、アイルランドのケルト神話みたいな多神教のものは、日本人にも理解しやすいので、そのような類似したものについて言及することで、日本人の日常のあり方について、理解してもらえるのではないか。

○ 日本人に対してもそうだが、説明する上でそこの伝統や云われ、由縁など、色々なものがあるので、そういった背景も説明の中に盛り込んで、初めて神社仏閣の価値を伝えることができるのではないか。また、日本人自身が、そういった古き伝統の中に生きているかどうかということも海外の方に伝えていく必要がある。宗教観も信仰に対する考え方も時代とともに変わっているので、どういう宗教観で普段生活しているかということも必要である。

○ 日本人の若い人でもそうだが、例えば伏見稲荷などの現世の御利益というのによく反応するので、商売繁盛や縁結びなどの説明もいいのではないか。またスマホなどで情報を見ながら動く人も多いので、ホームページでの情報発信なども力を入れていく必要がある。

○ また、点から面へということで、日本文化をもう少し深く知ってもらいたいという場合は、神社仏閣だけの知識を与えるよりも、例えば能などのテーマに沿って、様々な場所に訪れてもらうことで、理解してもらうようにする工夫も必要ではないか。

【平岡委員】

○ 外国人に如何に東大寺または仏教を伝えるのかが、非常に難しい。または仏教から教えなければならない。仏教と神道とはどう違うというのを伝えてから、個別の質問に答えていくのだが、東大寺の場合は特殊で、例えば大仏殿をローマ字表記すると長くなるので、「Great Buddha Hall」とか「Great Buddha」と言った方が分かりやすいということも考えた方がいい。「大仏」と書いた横に、「Great Buddha」と併記したり、方向を表す時でも矢印と一緒にした方が分かりやすい。

○ 言い方に関しても東大寺の場合、普通なら「East Great Temple」となるが、例えば「Great Eastern Temple」の方が良かったりする場合もあるので、そういったこと考えてはどうか。

○ また、奈良などでもルートバスや循環バスには割と英語で書かれているが、そこにも「JR Station - Kintetsu Station - Kofukuji Temple - Daibutsuden」」と書いてあったりして、長過ぎて読めないので、全てをローマ字にするのではなくい、場合によっては英語を使うのも一つの手ではないか。

【長崎課長から岩橋委員への質問】
⇒ この冊子は、傘下の神社にも広がっているのか。

【岩橋委員】
○ まだこれからである。神職は今登録上 2 万人ほどいるが、その中で英語が出来る人がどれだけいるかという問題もある。1 月から 12 月までが分からない人もいる。

【長崎課長】
⇒ 例えば「神社」とか「神」とか主語になるような言葉は、ある程度統一感を持ってやっていかないと、色々な場所を巡った時に分かり辛いので、冊子の中の「神道の由来」であるなどの事例が広がった方がいいのではないかと思う。

【野田委員より岩橋委員への質問】
○ 空港や主要駅、地方部の観光地などにこれを置けば非常に便利であると思うが、そういったことをする考え方はないか。

【岩橋委員】
○ 色々な場所に働きかけはしているのだが、例えば、明治神宮の平日昼間の参拝者の 8 割が外国人という状況を鑑みて、原宿駅等に英語で解説したものを置きたいと申し出ても、公共機関なので宗教のものはと言われてしまう。
　しかし、伊勢・志摩辺りのホテルに関しては、外国人観光客も増えているので、置いてくれるという返事をいただいている。
　行政が絡んでいるところや、昔公営であったところは非常に敷居が高いのが現実。

【リンネ委員から岩橋委員への質問】
○ 非常にきれいな言葉で書かれていて、私たちが読んでも非常に読みやすいが、最初から英語で書かれた文章か。どういった人が製作したのか。

【岩橋委員】
○ 原案は私を含め日本人 3 人とカナダ人 1 人で作ったが、それではどうしても知っている者が書いてしまうことになるので、知識のない人に読んでもらい、校正して、完成まで 2 年掛かった。

【高野委員長】

○ これ単体で行くと宗教だと言われてしまうかもしれないが、他に祭りや縁日とか日本を読み解くためのワードをもっと入れて、全体を説明するのであれば、理解してもらえるのではないか。

【アトキンソン委員】

○ 世界全体で、11 億 3,000 万人の観光客がおり、そのうち 5 億 7,500 万人が欧州から、その次がアジアで 2 億 4,900 万人、次がアメリカで 1 億 8,900 万人となっている。その 5 億 7,500 万人の欧州からの国際観光客の中で、日本に来ているのは 108 万人で 0.2%、アジアは 2 億 4,900 万人のうち、1,000 万人強で 4%程度、アメリカは 112 万人で 0.4%となっており、アジアにもまだまだ伸びる余地はあるが、圧倒的に来ていないのは欧州の人達であり、これをどうにかしなければいけない。

○ 解説がない文化財は来ても価値を感じない、意味が分からないというコメントが非常に多く、行ってもしょうがないという口コミが多くある。欧州では、文化財観光というのが成立しているので、本来一番来てもらいやすい人たちである。

特に、英仏伊を中心に文化財は学ぶ場所であり、ビジターセンターを充実させているというのが特徴であるが、日本では見ることがない。

○ 簡単なことであるのだが、文化財を観光資源として考えた場合、その解説や展示、プレゼンテーションは、何時間も飛行機に乗って、高いお金を払って見に来る価値があるのかということ。最近視察に行った場所では、素晴らしい兜がいくつか展示してあったが、その英語解説がどれもこれも「Kabuto：Helmet」になっている。他にも剣が展示してあり、「Sword」「Long Sword」「Short Sword」となっていたり、高いお金を払って見に来る価値はない。何が見どころで、いつの時代で何を見てもらいたいか、何故これを展示しているのかを説明することが必要だということ。

○ 既に他の方も言われているが、日本人向けの日本語を英訳しただけでは通じないことが多い。翻訳よりも意訳が大切である。今、奈良県の HP の監修をやっているが、もう日本語という概念を捨てて、最初から英語で作って、それを説明として受け入れられるかをやったほうがいいのではないかと思われる。

また、例えば「大化の改新によって律令制度ができた」という英訳でも、いくら綺麗な英語になっていても、「大化の改新」、「律令制度」の説明がなければ意味が分からないので、やはり意訳が必要なのではないか。

○ また、最近の HP を見ると、何ヶ国語対応などと、多言語自慢競争のようになっているのを見ると、確かにトップページやマップは確かにそのとおりになっているが、本文は英語のままのことが多い。トップページやマップくらいの英語は皆読めると思わ

れるのに、その辺りを多言語化する必要があるのか。中身の充実の方が重要である。二条城のパンフレットなどでも、1 枚の中に何ヶ国語も入れてしまうと、一つの言語の内容が少なくなってしまうので、残念なやり方ではないか。

○ 最後にネイティブの方だから文章力があるとは限らないということを強く強調しておきたい。教養だとか学歴がと言った発言をするつもりはないが、最近紹介された方で、高校時代に留学して、そのまま鎌倉に住んでいる人がいたのだが、実際に会ったら多少は知っているのかもしれないが深いところまで知っているわけではない。なのに、弓道をやっているというだけで造詣が深いとされているのは違うのではないか。他にも英語で HP を作るにあたって、ライターと紹介された人にサンプルを送ってもらったら、違和感があったので、その人の経歴を送ってもらったら、実はデンマーク人だったこともある。ネイティブな英語ではないと言ったら、外国人だから英語はネイティブと言われたこともあったので、外国人であれば、誰でもいいというはやめた方がいい。神社仏閣の話であっても、ちゃんと専門家にやってもらわないと難しい。

○ 他にも京都で講演会をした際に、竜安寺の庭の話で言われたのが、竜安寺は何度も来ているうちによさが分かってくると言われたが、私がどう思う、お坊さんがどう思うではなく、来ている人にそれを決めてもらいたい。日本人同士で英語をどうするかということを議論していること自体、いい物ができるとは思えない。

【スミス委員】

○ 私たちは JET プログラムという事業で、外国人の青年を日本に誘致し、数年間外国語の指導に従事する教職員や、国際交流業務に従事する役場の職員などとして働いてもらう事業を行っている。

○ 今までに文化財の英語解説を充実させるという事例はあまりなかったが、JET プログラムで誘致した人たちが、この取り組みの中で力になれると考えている。

○ 国際交流の事例として、富岡製糸場はユネスコの世界遺産として登録されるよう市全体で取り組んでいたと聞いているが、その中であるフランス人の方は、ただの通訳としてではなく、登録に向けた運動の中心となっていた。また、福岡のアジア文化交流センターでは、中国人、韓国人、シンガポール人が一人ずつ所属しているが、館内表記の翻訳のほか、海外に同行し、文化財の借用などの交渉の場で通訳したりしている。最後に ALT の活用として、徳島では定番の活動の一つとして、夏休み期間に地域の子供たちとその地域の神社仏閣を訪れて、その神社仏閣について英語で考えてみる取組が行われている。対象は小学生なので、そんなに難しい英語の解説はできないが、この授業の目的は子供たちの英語力向上ではなく、その地域に住んでいる外国人の先生に地域の文化財について知ってもらい、普段の授業で活かしてもらうことが目的で

ある。
　他にも既に帰国しているALTの自主的な取り組みだが、愛媛県のALTがお遍路の文化に魅了されて、得意なイラストを利用して、お遍路の文化を英語の絵本にして母国で販売したと聞いている。

○ 石川では、JET地域国際塾という三日間のイベントがあり、全国各地からALT等に集まってもらい、地域振興活動の有識者の話を聞いてから、現地に行って、そこの地域の魅力を発掘して発表してもらう取組もあった。

○ 元JETプログラム参加者は世界で6万4,000人以上おり、そのネットワークを強化して活動に活用していきたいという声が高まっている。

【萩村委員】
○ 通訳案内士として、現場に一番近い、外国人の方々と接している立場から言わせてもらうと、どこの神社仏閣も外国語解説はそれほどまだ進んでいないのではないか。例えば、京都であれば、金閣寺は100%の方が行かれるが、立て看板などは英語がほとんどなかったように記憶している。パンフレットなどは数ヶ国語であるが、パンフレットというのは見学した後でバスの中で見る物であり、その場では見ない。多くの方は、金ぴかですごいですねと言って写真を1枚撮って通り過ぎる。大きな松があるねと言って、写真を撮って通り過ぎる。これで終わり。それがどういう意味なのか理解出来ていないことが、どこでもあるように思える。

○ 他にも金閣寺の場合、お札が配られるが、当然解説は何もないので、必ずこれはどういう意味かを聞かれて、これはこういう意味で、何故二つの印鑑があるのかを説明している。意外と外国から来る人は、こういうことに興味を持たれている。

○ 他の人も言われているが、見たことないもの知らないものというのは、母国語で書かれていても分からない。ここにいる方々は専門の方々ばかりなので、驚かれるかもしれないが、神道と聞いて分かる方は経験上いない。何度も日本に来ている方は別だが、初めて日本に来る方には必ず神道とは何かと聞かれる。仏教は皆知っていて、聞いたことがあるが、神道は全く知らないというくらいに思ってもらった方がいい。

○ 例えば、清水寺では「清水寺」の下に「HITACHI」の名前が入った看板が設置されており、中国人の方は漢字が読めるので「世界遺産で有名な清水寺か」と理解できるが、漢字圏でない人は「HITACHI」しか理解ができない。そういったところがもったいないので、変えた方がいいのではないか。

○ 他に文化財ではないかもしれないが、私がいいなと思った例が、広島の平和記念資

料館。中は、皆静かに見学しており、よほど解説が色々と書いてあるのかというとそうではなく、日本語と英語しかない。多くの方が音声ガイドを使っておられる。その音声ガイドが、日本語含め 17 ヶ国語に対応しており、1 回 300 円でレンタルできる。英語ができる方でも、できれば母国語で解説を聞いてもらった方がいいので、是非借りた方がいいと説明している。また、パンフレットも 10 言語で発行されており、中身もかなり充実しているなという印象。

○ 最後に私たちが大事にしたいのは、私たち日本に住んでいる人は何度でも行けるが、外国から来た人はもしかしたら最初で最後かもしれない。それが金閣寺などに行った時に、「きれいだね」だけで終わってしまうのは非常に残念。私たちガイドがいれば説明できるが、そうでなければ少しでも理解してもらった方がいいという意味でも、この英語解説の意味はあるのではないか。

【西山委員代理】

○ 京都が目指す観光の姿としては、景観や文化、芸術、伝統、産業、文化財など、歴史の中で日本文化発信の中心地ということもあり、全ての観光客から奥深い京都の本質を体感できる観光が望まれている。昨年のアンケートで 2 回以上京都を訪れた外国人が昨年に比べ 21%増加している。これは京都に興味を持っていただいて、また来たいと思ってもらえていると意識している。

○ それに対し、京都では「京都観光振興計画 2020」を策定し、4 つの目標のもと、191 の事業を展開している。常に私たちが言っているのは、本物の本質の京都に触れていただくことを増やしていこうということ。あこがれを持って帰ってもらい、それを伝えてもらって、また来てもらうという取組を行っている。

○ 一方で、そのアンケートの中で残念度のトップで減っていないものが、言語・案内・標識であり、その中でも神社仏閣や美術館等で外国語表記を増やしてほしいというニーズがあることは、認識している。京都の最大の強みである、文化について、外国人にその本質を伝えられるようにしていく必要があると認識している。

○ 今後の満足度向上に向けて、市内の文化財の英語表記について、市内に 3,000 を超える文化財があり、所有者がそれぞれ管理しているが、二条城を始めとして英語解説のさらなる充実が必要であり、先ほどから何度も言われているように、歴史的背景や、英語自体の本質的な表、英語で考えて表記することや、真の本物の文化の価値を伝えていくことが大事だと感じており、文化庁のモデル事業の応募等を通じた取組も必要だと考えている。

○ また、京都では、特区通訳案内士制度の創設に向けて動いている。たくさん文化財

がある中で、本質を知りたい外国人のニーズ、需要は今後も拡大すると考えており、そこで、特区制度を活用した通訳ガイドを育成していきたいと考えている。全国ガイドの皆様にも受けていただいて、普及拡大をして、京都での質の高いガイドの確保をしていけるようにと考えている。

○ また、このような取組を通じて、外国人の方のビジネスの展開していき、雇用の創出に繋げていきたいと考えているが、数多くの文化財が存在し、それぞれに所有者がいる。この方々に多言語表記に理解をしてもらう必要があるが、関心のない方もいるので、必要性を丁寧に説明していく必要がある。

○ 最後にそれぞれの専門知識を持った方に英訳をしてもらうと必要があると考えている。これには多額の予算に、長期的な取組をしなければいけないので、今後国の方にも協力していただきたい。

【リンネ委員】

○ 私は以前 15 年程度日本に住んでおり、その時に国立博物館で非常勤職員として、バイリンガルウェブサイトの作成やメンテナンスなどをしてきて、その後、アメリカのサンフランシスコ・アジア美術館というところで、日本美術の担当学芸員として、日本語を与えられて日本語を翻訳するのではなく、自分で英語を書いて仕事をしていた。その英語もそのままではなく、必ず日本美術専門家ではない上司や他の方が読んでチェックしてから出すということをしてきたので、その経験を元に今日は話したい。

○ 今までのよくある英語解説というのは、あくまで日本語がメインで英語はサブになっている。ポーランドの博物館などでも、同等に併記されている。そこが日本と大きく違う。それから日本語から英語に翻訳されていることが多い上、日本語の一部だけが英語に翻訳されていることも多い。

○ 何故そういう解説があるかというと、まず物をよく見てもらい、理解してほしい。そして一番大切なのは、その文化財に何かを感じて、記憶に残るものにしてほしい、いい経験にしてもらいたいということである。

○ 全体的に外国人の立場から考えておらず、肝心な情報が抜けていることが多い。日本人にとっては当たり前のことが言葉にされていない。例えば江戸時代がいつということであったり、何時代から何時代まで生きていたという人であるという説明がよくない。もう一つは、日本人的な立場で考えており、外国人が知りたいこと、「誰が、何を、何時、何処で、何故」といった基本的なことが開設されていなかったり、どうやってという基本的なことが解説されておらず、途中で読むのをやめる。

○ おもしろくない解説というのは、今までにも言われているように直訳されていたり、専門性のないネイティブじゃない翻訳者の解説だったり、教育的過ぎて肝心な部分が抜けているとか。やはり実際に文章を作る人次第ではないか。文章力のある人、専門性のある人、分かりやすく解説できる人がいれば、うまく行く。今までの話の中でもあったが、翻訳ではなく、元の文章を英語で作ってもらう。それから、日本人と協力して情報を集めてそれを元にして書くことが重要。

○ あとは欧州などの英語圏ではフォントとかデザインにも非常にこだわっている。日本では、事務フォントがそのまま出ているだけなので、やっぱりデザインも読もうということに繋がるので、英語的なデザイン基準に慣れた人にお願いすることも大事ではないか。

○ 理想的な英語は長過ぎない、複雑すぎない、分かりやすい文章のこと。最後はなるべくネイティブで文章力のある人に書いてもらうか、翻訳してもらうか、プロジェクトを考える時に事前にそういった人材を確保しておくことが重要ではないか。

【アトキンソン委員から萩村委員への質問】
○ 実際に案内する際に必要な情報について、神社仏閣自体も整理できていない中でどうやって入手しているのか。

【萩村委員】
○ 私たちはほとんどがフリーランスなので、自分の方法で勉強して情報を集めて、自分で外国語に表現している。テキストは何もありません。あと、お客さんのバックグラウンドに合わせて説明の仕方を変えている。例えば、日本に何回来ているか、後は英語が喋れたとしても、英語が母国語の人かどうかということなども踏まえた上で、説明している。

【岩橋委員より萩村委員への要望】
○ 実は私共のあの冊子は神主さんよりも現場で見かける案内している人に使っていただきたいということもある。というのも、実際に現場で見かける方の説明を聞いていると、ん？と思うこともあるので、是非活用していただきたい。

【萩村委員】
○ 私も今見ていて、この冊子が非常に素晴らしいと思いながら見ていた。これを見て、現場でどういう風に説明するかまた勉強したいと思う。

【平岡委員】
○ 言い忘れたが、仏教のことを説明するときには、やはり仏様の元々の名前、サンス

クリット名まで話さないと、大乗仏教は話せないので、その辺を勉強してもらった方がいいのではないか。

【長崎課長より西山委員代理への質問】
⇒ 京都市では、観光部署で、外国語表記はこうしたいとか、通訳案内士をこうしたいということを考えているのか、それとも文化財を所管している教育関連部署で中身の話をしているのかどうやっているのか。

【西山委員代理】
○ うちの体制はこれから。観光は観光で特区通訳案内士のことから受入体制を考えている。アトキンソン委員からも今までに色々な指摘をいただいており、それぞれが連携していく必要があることは認識しており、これから相談していきたいと考えている。

【長崎課長】
⇒ 現場で聞くと、やはり観光部署が外国語表記を頑張ろうと言っていても、教育委員会が所管はしているので、分からないと言われることが多いと感じているので、私たちが文化庁と連携しているのもそういったところにある。満足度向上のための外国語表記であるとか、通訳ガイドであるとか中身の話を縦割りにするのではなく、利用者目線でやっていければと思うので、是非お願いしたい。

【西山委員代理】
○ 私どもも一緒にやりたいと思っている。

【高野委員長】
○ 日本人に対しても適切に解説できていないという話が色々な人から出ていたので、例えば修学旅行生向けの説明とかを共有していけば、変わっていくのではないか。

○ 最後に次回のヒアリング対象について、委員の方から意見はあるか。
【アトキンソン委員】
○ 日光新宝物館。

【高野委員長】
○ 他にはどうか。もし他にあれば、後日事務局にメール等で連絡してもらいたい。

以上

別紙　第１回会議 出席者一覧（敬称略・50 音順）

＜委員＞
小西美術工藝社 代表取締役社長 デービッド・アトキンソン
神社本庁 教化広報センター 広報国際課長　岩橋　克二
自治体国際化協会　JET プログラム事業部 プログラムコーディネーター　エリック・スミス
国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系教授　高野　明彦
全国社寺観光連盟　理事 野田　博明
日本観光通訳協会 会長 萩村　昌代
東大寺 執事長　平岡　昇修
京都市　産業観光局 観光 MICE 推進室　担当課長　西山　圭児　（代理）
京都国立博物館 フェロー国際交流担当　マリサ・リンネ

＜文化庁＞
文化庁次長　有松　育子
文化庁 文化財部長　村田　善則
文化庁 文化財鑑査官　齊藤　孝正
文化庁　文化財部伝統文化課 課長　大谷　圭介

＜観光庁＞
観光庁　観光地域振興部長　加藤　庸之
観光庁　観光資源課 課長　長崎　敏志